夏目漱石 吾輩は猫である夏目漱石

吾輩（ わがはい ）は猫である。 名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当（ けんとう ）がつかぬ。 何でも薄暗いじめじめした所でニャ ーニャー泣いていた事だけは記憶し ている。 吾輩はここで始めて人間というも のを見た。 しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番檸悪（ どうあく ）な種族であったそう だ。 この書生というのは時々我々を捕（ つかま ）えて煮（ に ）て食うという話である。 し かしその当時は何という考もなかったから別段恐し いとも 思わなかった。 ただ彼の掌（ て のひら ）に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりで ある。 掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というも のの見始（ みは じめ ）であろう。 この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。 第一毛をもって装 飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶（ やかん ）だ。 その後（ ご ）猫にもだいぶ逢（ あ ）ったがこんな片輪（ かたわ ）には一度も出会（ でく ）わした事がない。 のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙（ けむり ）を吹く。 どうも咽（ む ）せぽくて実に弱った。 これが人間の飲む煙草（ たばこ ）というものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏（ うち ）でしばらくはよい心持に坐っておったが、 しばらくすると非 常な速力で運転し始めた。 書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗（ むやみ ） に眼が廻る。 胸が悪くなる。 到底（ とうてい ）助からないと思っていると、 どさりと音が して眼から火が出た。 それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとし ても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。 たくさんおった兄弟が一疋（ ぴき ）も見えぬ。 肝心（ かんじん ）の母親さえ姿を隠してしまった。 その上今（ いま ）までの所とは違って無暗（ むやみ ）に明るい。 眼を明いていられぬくらいだ。 はてな何でも容子（ ようす ）がおかしいと、 のそのそ這（ は ）い出して見ると非常に痛い。 吾輩は藁（ わら ）の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ょうやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。 吾輩は池の前に坐ってどう したらよかろうと考えて見た。 別にこれという分別（ ふんべつ ）も出ない。 しばらくして 泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。 ニャー、 ニャーと試みにやって見た が誰も来ない。 そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。 腹が非常に減っ て来た。 泣きたくても声が出ない。 仕方がない、 何でもよいから食物（ くいもの ）のある 所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左（ ひだ ）りに廻り始めた。どうも非常 に苦し い。 そこを我慢して無理やりに這（ は ）って行くとようやくの事で何となく人間臭